

クレアでは自治体の海外経済活動に対して、より効果的な支援を行うため、経済交流課に経済アドバイザー（商社 OB）を配置しています。海外経済活動に必要な基本情報から、輸出入業務や海外でのイベント展開、商談を行う際の注意点などの個別具体的なアドバイスまで、専門的見地からの助言を行っています。どうぞご活用ください。



(クレア経済アドバイザー 小笠原正広)

## 1. はじめに

アセアンで最大かつ世界 4 位の 2 億 5,100 万人の人口を持つ多様性の国、インドネシアは古くから日本と身近な関係にある事を知っているだろうか。アセアンの中でも親日的な国民性で、資源大国であり、経済発展の可能性を秘めた、古くて新しい国インドネシアの文化について紐解いてみたい。

インドネシアの面積は日本の約 5 倍（190 万km<sup>2</sup>）。そして日本同様海洋国である。インドネシアを構成する島々は約 13,466 島からなり、その分布海域の広さはアメリカ合衆国に匹敵する。また、約 130 の火山があり、そのうち約 80 が活火山だ。

そして 300 以上の民族、約 250 種の言語、主な民族としてはジャワ人、スンダ人、バタック族、メダン人、アンボン人、メナド人、ブキス族等は今でも民族独自の言語と独特の文化を持っている。



インドネシア地図 (<http://www2m.biglobe.ne.jp/ZenTech/world/info/>)

私とインドネシアとは、企業のビジネスパーソンとして、1974 年にパームオイルの輸入販売担当としての関わりが第一歩となった。その後、通算約 5 年間の駐在経験と、数々の出張を繰り返した。企業を退職してからも、現地友人を通じて関わりを持ってきた。インドネシアはまだ記憶に新しい 1999 年～2004 年の政変や暴動、大統領が次々と変わり、正に混沌の時代を経験しながら今や、アセアンのリーダーとして自信に溢れている。同時に、独自の伝統文化と温かな国民性を有し、イスラムの大国の一つとして融和を重んじる国でもある。インドネシアが、これから日本とアセアンの中でどんな役割を演じていくのか興味は尽きない。融和と多様な文化を持つ国、インドネシアを一言では語れないが、日本と同じ 2000 年の歴史を持つ国であり、驚く事に、言語や習慣などにおいて極めて類似性がみられる。

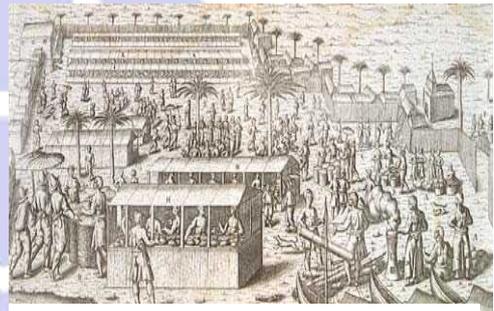
## 2. インドネシアの歴史

現在のインドネシア人の祖先は紀元前 2000 年～3000 年頃からアジア大陸の東南地方から移動し、農業や狩猟を生業とし、原住民を駆逐し定住するようになり、精霊崇拜を主とする土着の信仰を持っていた。その後、西暦紀元前後よりインド人が渡来してきた。彼らは文明度が高く、次々と原住民と同化し、ヒンドゥー教と仏教を広めて行った。そしてジャワ地方の西部、中部に小国家の建設を始めた。西暦 7 世紀後半にはスマトラ島のパレンバンに

「スリウィジャヤ王国」を建国。この王国はヒンドゥー教よりも仏教の影響を受け、スマトラ島、マレー半島、ジャワ島にも支配権を及ぼし、中国やインドとも交易を行い 14 世紀まで栄えた。

8 世紀以降、中部ジャワ島にも、いくつかの王国が栄え、この時代に現在世界遺産となっている「ボドブドゥール(仏教) やプランバナ(ヒンドゥー教)」の寺院が建てられた。そして 12 世紀～14 世紀まで黄金時代を築いたのは東部ジャワ島の「モジョパイト」王国であった。産業、海運、文化が隆盛をきたし、貿易、商業が盛んになり、はるかペルシャや南インドからの商人を通じイスラム文化がインドネシアに入って来た。15 世紀になると、この王朝はイスラムを信奉する海岸地方の国によって滅ぼされてしまった。イスラム教の教義がより庶民的、より民主的、より現実的であったため、16 世紀末までに、ほとんどのヒンドゥー国家がイスラム化した。バリは頑なにヒンドゥーを守りぬき現在に至っている。

次にヨーロッパの国々がインドネシアに影響を与え始めた。すなわち、インドネシア地域に産出する香辛料を求めて激しい主導権争いを始めたのがそのきっかけになった。1511 年にポルトガルがマラッカの港を征服したことから、ポルトガル、スペイン、イギリスが次々とインドネシアにやって来た。中でもオランダは東インド会社を作り、ジャワ島からマルク諸島をはじめ、近隣諸国に侵攻し、香辛料貿易を独占するようになった。キリスト教伝道を巧みに利用して、1650 年～1700 年の後半までその権益を独占した。その後ナポレオンがオランダ本国を支配下に置いたため、1811 年～1816 年までイギリスがオランダに変わってインドネシアを統治した。1814 年ナポレオン没落後、オランダはイギリスとロンドン条約を締結した。ロンドン条約によりマレー支配権と引き換えに、オランダはインドネシアにおける支配権を確立し、インドネシアを植民統治下に治めた。このオランダによる植民統治は 1941 年の日本の軍政が始まるまで続き、この間インドネシア農民は長く貧困にあえぎ続けたのは想像に難くない。



1510 年代のバタヴィア港(オランダ支配の始まり) <http://www.jtkc.zaqq.ne.jp> より

そしてインドネシアは、日本が連合国に降伏した 1945 年 8 月 17 日、スカルノ氏とハッタ氏を中心に、インドネシア共和国の独立宣言を行ったのである。この時、オランダ政府は植民地統治を取り戻すべく、武力をもってインドネシアの独立を阻止しようとしたのである。ここで日本人が忘れてはならない光景がある。それはインドネシアの人々が「独立戦争」と呼んだオランダ軍との数年間に及ぶ戦闘に、太平洋戦争で敗れ軍籍を離れた多くの日本人兵士達がスカルノの唱える民族独立の理念に共感し、インドネシアの人々と共に銃を取ったのである。日本の敗戦後、インドネシアの独立に命をかけ、共に戦った日本人兵士の名前が刻まれた墓碑がジャカルタ郊外の墓地に眠っている。これらの日本人兵士達の思いは何だったのか、今も無言で示し続けている。この無言の理念こそ日本とインドネシアとの関係の原点であると筆者は思う。

-次号へ続く-

クリア経済アドバイザー <http://www.clair.or.jp/j/economy/3/>